

共産党の組織方針と活動方法について

共産主義インタナショナル第二回大会関係資料*

- 一 「プロレタリアートの独裁」という概念の内容、およびこのスローガンの「今はやりの」歪曲との闘争についての決議のプラン**

- 一 プロレタリアートのまさに革命的な部分だけを選びだして党に採用し、また党のやほり同じような部分を選びだして党の指導機関に採用すること。
- 二 党内や労働運動内の改良主義と日和見主義を、大衆の前で系統的に暴露すること。
- 三 党の支部でも、労働組合でも、協同組合でも、クラブでも、文化＝啓蒙団体でも、ひとことではいばプロレタリアートのすべての組織で、日和見主義的指導者を革命的指導者に代えること。
- 四 労働運動全体（と小農民の運動の一部）を党が系統的に指導するために、ありとあらゆる種類の労働者団体や小農民団体内に共産党の細胞をつくること。
- ＝三？ 五 平和的な活動の伝統や習慣や先入見、議会主義、合法主義を完全にまぬかれた、完全に革命的な労働者を、(1) 改良主義や日和見主義とたたかう能力があり、(2) プロレタリアートのもっとも広範な大衆や、プロレタリアートのもっとも革命的な部分と固く結びついているなら、たとえきわめて無経験な者であってもよいから、かならず任命すること——
- そういう労働者を十分な人数だけ、党内のもっとも責任のある部署に、とくに党中央委員会にも、議員団にも、さらにすべてのきわめて重要な（それを獲得することが党にとって重要な）諸機関にも任命すること。
- 六 議員団をとくに細部にわたって党中央委員会に従がわせること、後者が議員団をとくに厳重に監督すること。
- 七 対敵協力者、プロレタリアートとブルジョアジーや所有者とのブロックの支持者（および実行者）とみるべき者は、これらの思想を露骨に実行する者、連立政府等々を主張する連中だけではない。それを間接に実行する者、たとえば労働者階級と小所有者階級との平等を主張する者、両者の見解の同権を主張する者等々もやはりそういうものとみるべきである。
- 八 改良主義者（あるいは改良主義にたいする調停派）の諸機関紙、……⁽¹⁾『ユマニテ*3』は、閉鎖しなければならない。党には、完全に革命的な傾向をもつ——『ポピュレール*4』や『フレイヘイト*5』のようでない——一つの中央機関紙がなければならない。党のすべての新聞雑誌——単一の思想、一つの傾向、独裁の準備。
- (1) 手稿では、ここの一語が判読できない。
- 九 いっそう深く大衆のなかへ。労働貴族のためにではなく、——未熟練の大衆のために。都市のためだけではなく、農村のためにも。大衆のあいだで宣伝するだけでなく、扇動すること（contra British Socialist Party [イギリス社会党*6 とは反対に]）。先進的な労働者の醵金で遅れた労働者のために無料でリーフレットをくばること。プロレタリアは——ストライキ労働者や雇農を援助するために、大衆のなかへ。

一〇 日和見主義的指導者の誤りや裏切りを大衆の前で公然と分析すること（1919年7月20－21日のストライキ、等々）。

議員その他の演説のあらゆる日和見主義的な誤りや弱点を、出版物の紙上で分析すること。

一一 あらゆるきっかけで、あらゆる方面で、あらゆる生活分野に応じて、系統的におこなうこと。

プロレタリアートの独裁の具体的な諸任務を明らかにすること。すなわち、

(イ) 搾取者（クラークやインテリ怠業者をもふくめて）の抵抗を弾圧すること。

(ロ) 没収。というのは、1914－1918年を経た今日では、買取りは不可能だから。

(ハ) 搾取者やブルジョア・インテリゲンツィアにたいする特別の監督。

(ニ) 労働者と

すべての被搾取大衆と

小農民の

生活を、搾取者の負担で

ただちに、革命的に改善すること。

(ホ) 小所有者

中農

手工業者

小工業者

一部のブルジョア・インテリゲンツィア

を中立化すること、すなわち彼らが白衛派に投じるのを阻止すること。

(ヘ) 抵抗を弾圧する決意、能力、手腕、特別の組織。

一 総括＝(α) 撃破する

(β) 引きよせる

(γ) 中立化する。

一二 E.puration [粛清] ……

一三 「出版の自由」？——「集会の自由」？——「人格の自由」？

党＝前衛

(α α) (一) 革命的部分

(β β) (二) 大衆と結びついた。

即時の準備 二、三、四、五、六（+一三）、七 α α

八、九、一〇 β β

主要な危険——右派、すなわち更迭されなかった指導者。

三つの党（+アメリカ社会党*⁷）（+スイス社会党*⁸ ？）。即座に加入させることは不可能。

左派。彼らの誤り。即座に加入させることが可能。

イタリアの党（たぶん、+イギリス社会党？）内の改良主義

NB(注意)

フランスの党と出版物にかんする委員会

ロゾフスキー セラティ

＋ブハーリン デリニエール
＋ギルポー ＋
 サドウル

*** 共産主義インタナショナル第二回大会**

1920年7月19日－8月7日にひらかれ、コミンテルンの綱領、戦術、組織上の基礎をきざいた。くわしくは、本全集、第31巻、207－257ページおよび関連訳注を参照。

** これは『共産主義インタナショナル第二回大会の基本的任務についてのテーゼ』（本全集、第31巻、176－193ページ）の下書きの一つである。

*** 3 『ユマニテ』（『人道』）**

1904年、フランス社会党の機関紙としてジャン・ジョレースの創刊した日刊新聞。第一次世界大戦のときには同党の極右翼の手中にあった。1920年12月同党の分裂後、フランス共産党の中央機関紙となって現在にいたっている。

*** 4 『ポピュレール』（『人民』）**

フランスの中央派の創刊した新聞。1916年からリモージュで、1917年7月からパリで刊行されている。1921年いらい、フランス社会党の機関紙。

*** 5 『フライハイト』（『自由』）**

ドイツ独立社会民主党の機関紙である日刊新聞。1918年11月15日から1922年9月30日までベルリンで出していた。

*** 6 イギリス社会党**

1911年、社会民主党その他の社会主義グループが合同して、マンチェスターで創立された。しかし、党員数が少なく、大衆との結びつきがよわかったので、いくらかセクト主義的であった。第一次大戦中党内では国際主義的潮流と社会排外主義的潮流とが激しくたたかったが、後者は、1916年4月に同党を脱退した。

同党は十月革命を歓迎し、ソヴェト・ロシア擁護に大きな役割を果たした。1919年、党組織の大多数はコミンテルン加入に賛成した。同党は、「共産主義統一グループ」とともに、共産党創立に大きな役割を果たした。1920年の合同大会で、地方組織の圧倒的多数は共産党と合同した。なおくわしくは、本全集、第31巻、548ページの該当注を参照。

*** 7 アメリカ社会党**

1901年、社会主義労働党と社会民主党から分離したグループの合同によって、インディアナポリス大会で結成された。社会民主党の創立者のひとり、ユージン・デブズが新党創立者のひとりになった。アメリカ人および移住者の労働者の一部とともに、小農民や小ブルジョア出身者も加入していた。中央派と右翼日和見主義者からなる指導部（バーガー、ヒルキットその他）は、プロレタリアートの独裁の必要を否定し、革命的闘争方法を放棄して、党活動を選挙運動にかざろうとした。第一次大戦のとき、党内は社会排外主義者、中央派、革命的少数派に分かれた。

ルーセンバーグ、フォスター、ヘイウッドその他をはじめとする左翼は、プロレタリア分子をよりどころにして、日和見主義的な党指導部とたたかい、プロレタリアートの独自の政治行動、産業別労働組合の創立のためにたたかった。1919年、党は分裂し、党を出た左翼はアメリカ共産党の創立を提唱し、その中核になった。

*** 8 スイス社会民主党**

十九世紀の七〇年代に創立され、第一インタナショナルに加入していた。1888年に再度創立された。党内では日和見主義者が大きな影響力をもっていた。1916年の秋、左派は脱党して、自分の組織をつくった。グリムをはじめとする大多数は中央主義的、社会平和主義的立場をとっていた。左翼は国際主義の立場に立っていた。彼らは1920年12月、脱党して、1921年にスイス共産党と合同した。

第42巻『共産主義インタナショナル第2回大会関係資料』P258～262

1920年7月、おそくとも4日に執筆 手稿によって印刷